

ぴとん

— RH —

(アール・アッシュ)

人の輪をもって
尊しとなすバー

北野に佇むバー・RH（アール・アッシュ）。オレンジ色の妖艶な光に包まれた店内は、2列のカウンターが向かい合うように並び、その間にサンゴを敷き詰めた花道のような通路が設けられているユニ



話題が尽きないマスターの平田さん。
店の目印は「ニョロニョロ」



カウンターが向かい合う店内では、マジックショーなどのイベントも開催

クなスタイル。初対面の人とも仲良くなれそうな空間構成で、和気藹々の雰囲気を楽しめるスペース。
もう一つ別室もある。その部屋はソファア席の個室。ろうそくの光がまたたき、落ちていたムード。こちらではゆつくり語るもよし、仲間で盛り上がるもよし。
「自分が心地よい空間をつくただけですよ」と語るマスターの平田さんは、実は昼間は会社勤め。夜の帳が下りると、このバーのマスターとなる。そればかりか道場を主催する空手家でもあり、たくさんの

顔を持つ。だからマスターとの会話は話題の幅が広く楽しい。最高の酒の肴だ。

ノーチャージなのも嬉しい限り。鹿児島産地鶏刺身や熊本産馬刺し（各1000円）の九州産直メニューと、外カリットと中しつとりのチヂミ、本格派テールスープ、臭みのない韓国風イカ塩辛などのコリアンフード（各400円）がオススメだ。お酒もワンシヨット400円と、リーズナブルに楽しめる。

「世知辛い世の中、ここにいるいろんな出会いが生まれ、人の輪が広がれば」というマスター。だから、仲良く楽しく気取らずに、今夜もグラスを傾けよう！

■RH（アール・アッシュ）
営業時間19時～翌2時
日曜・祝日・年末年始休
神戸市中央区北野町4-18-14
（神戸外国人倶楽部隣）
☎090-3820-6154





重野尚美さんのピアノ演奏にきき惚れる筆者



葡萄屋

神戸市東灘区郡家大蔵 1-1
御影メイト B 1 階
営業
18:00~23:00 日曜休
☎ 078-811-8686



左からアシスタントの岩田さん、マスターの細川さん

マスターの細川由之氏は異色の人物である。滞欧歴 16 年。10 年間はイタリアの国立ペルージャ・アカデミーでイタリア史の研究をしていた。大学院時代、バイトで現地のレス

多い。
「ドイツ風ビヤホールレストラン」とある。ビールはリーヴェンブロイ、ワインはイタリア産が多い。南ドイツ風ポテトがオススメ。ゆがいたメークイン（島原産）をパリッと揚げ直し、カリカリのペーコンと合わせた味は何ともいえない。クセになる。ローマ風牛肉の煮込み、ローストビーフなど日替りメニューも多い。

マスターの該博な知識、広い交友関係に驚くが、本当はアシスタント・岩田啓一郎君が店を支えているとみた。味覚と音楽、私の感育論にピッタリの店だ。

特筆すべきは、毎晩ピアノの生演奏が楽しめることだ。重野尚美さん（月水金）、高島美咲さん（火木土）、二人の美しき才媛が腕を披露。

マスターの該博な知識、広い交友関係に驚くが、本当はアシスタント・岩田啓一郎君が店を支えているとみた。味覚と音楽、私の感育論にピッタリの店だ。

阪急御影から 5、6 分のある。山手幹線のにしむら珈琲の角を少し南に下り、セブンイレブンの山側のビルの地下にある。

トランを手伝っていた。同様の経歴で有名シェフになっている人は少なくない。開店 20 年を間もなく迎える。震災で大きな被害を受けたが甦ったのは嬉しい。常連さんの熱意に助けられたという。アール・デコ風のインテリアが再現された。ガラスはベネチアのムラノ、皿はすべてマイセンと凝るマスターの熱い思いが伝わる。

六甲味散歩

Rokko Sampo

第 5 回 ドイツ風ビヤホールレストラン

葡萄屋



鈴木正幸
Masayuki Suzuki

笑いと演芸の殿堂として、市民に愛されていた「神戸松竹座」。かけがえのない空間だった小屋がなくなって約30年。新開地生誕100周年記念企画として、松竹座ゆかりの芸人を迎え、1日限定で復活させようというイベントを開催する。

出演は、松竹座常連芸人だった横山ホットブラザーズ、ゼンジー北京、横山たかし・ひろし他。また、桂雀々、桂あやめなど新開地おなじみの面々も盛り上げる。当時の熱気を感じさせる特別企画に、ぜひご参加を。



横山ホットブラザーズ

新開地生誕100周年記念企画 1日限定復活! 演芸のカイチ座

神戸アートビレッジセンター
(神戸高速「新開地」駅徒歩5分)
11/26(土) 16:00開演予定
予約券3,000円(売切御免)
■問:新開地まちづくりNPO
☎078-576-1218

気軽に邦楽鑑賞をと、正法寺が企画する「タートルコンサート」。筑前琵琶奏者・川村旭芳をレギュラーに、毎回、邦楽奏者のゲストを迎えている。

今回は、龍笛の出口煌玲を迎え、源義経が奏でた龍笛のしらべとともに、勧進帳の名場面から奥州平泉での最期まで、悲劇の伝説を音楽と語りで綴る。奈良春日・南都楽所で古典雅楽を学んだ出口煌玲は、古典演奏とともに、世界の伝統音楽とのコラボレーションや創作活動などでその世界を広げている。



川村旭芳

義経伝説 陸奥の旅路 ～筑前琵琶の語りと 義経が奏でた龍笛のしらべ～

瓦屋山 正法寺(ながたの旗振り山)
(山陽「高速長田」地下鉄「長田」駅
北へ徒歩約15分)
11/6(日) 昼の部13:30 夜の部17:30
一般1,500円
(予約制/定員昼夜各100名・先着申込順)
■問:正法寺 ☎078-642-2741

兵庫県立美術館で開催されている世界の音楽シリーズ。今回は、アジアとインドの音楽でシルクロードを旅する。

中世ムガル朝の宮廷音楽をルーツに誕生し、その悠久の時間を感じさせる音色が印象的な「シタール」、インドの太鼓「タブラ」に、西洋楽器「コントラバス」と、美しき女声歌唱が加わった新しいアジアのアンサンブルのステージ。出演は田中峰彦、田中りこ、岡野裕和、李浩麗。曲目は、インド古典音楽、ベンガル地方民謡、ウイグル民謡、沖縄や日本の歌曲など。楽器や風俗、習慣のお話などとともに至福の音空間を楽しんでほしい。



弦歌幻想 音楽でたどるシルクロードの旅Ⅱ ～アジア・インド～

兵庫県立美術館「アトリエ」
(阪神「岩屋」駅徒歩8分)
11/23(祝・水) 14:00開演
一般3,000円(前売2,500円)
■問:華音
☎078-230-0400
兵庫県立美術館ミュージアムショップ
☎078-265-6655

カナダの人形ショー劇団「フェイマス・ピープル・プレイヤーズ」は、知的障害を持つ人々を中心に構成されるプロの劇団。ブラックライトを照明に使い、音楽に合わせて人形や小道具がコミカルに動き回るファンタスティックで幻想的な舞台は、ブロードウェイやラスベガスでも絶賛されたほど。ポール・ニューマン、ステイブン・スピルバーグらにも支援されている。

演技に真摯に取り組む団員たちの姿と、エキサイティングな舞台は、きっとあなたを感動の渦に誘うだろう。



フェイマス・ピープル・プレイヤーズ 神戸公演

神戸文化ホール 中ホール
(地下鉄「太倉山」駅すぐ)
11/11(金) 12(土)
昼の部14:00 夜の部18:30
一般4,000円(前売3,500円)
小学生以下3,500円(前売3,000円)
■問:くの家 ☎078-707-6664
(月～金10:00～17:00)

ジャズライブ&レストラン SONE

- 11/1 (火) 幸島寿美子+トリオ
 2 (水) 新井雅代+トリオ
 3 (木) 北莊桂子+トリオ
 4 (金) 宮野英子+トリオ
 5 (土) 北莊桂子+トリオ
 6 (日) ロイヤル・フラッシュ・ジャズバンド
 7 (月) かねだたつ+ウクレレトリオ
 8 (火) 新井雅代+トリオ
 9 (水) 北浪良佳 (Yoshika) +トリオ
 10 (木) 増田真智子+トリオ
 11 (金) 北莊桂子+トリオ
 12 (土) ジャネット+トリオ
 13 (日) 鍋島直毅クワルテット+大越理加
 14 (月) 石野見幸+トリオ
 15 (火) キャンディー・浅田+トリオ
 16 (水) 北浪良佳 (Yoshika) +トリオ
 17 (木) 古谷充クワルテット
 18 (金) ベティ・鞍富+トリオ
 19 (土) 幸島寿美子+トリオ
 20 (日) ダボーズ
 21 (月) 浅香久志+トリオ
 22 (火) 北莊桂子+トリオ
 23 (水) 大越理加+トリオ
 24 (木) 長谷川元伸クワルテット+大越理加
 25 (金) 新井雅代+トリオ
 26 (土) 大越理加+トリオ
 27 (日) 北村英治クワルテット
 28 (月) ロアナ・シーフラ+トリオ
 29 (火) 猿丸詩摩子+トリオ
 30 (水) 長谷川元伸クワルテット+北莊桂子

■JAZZ LIVE & RESTAURANT SONE

北野坂 078-221-2055 無休

<http://kobe-sona.com>

★ミュージックチャージ900円

★日曜日昼下りのジャズライブ開催中

クラシックライブハウス ピアジュリアン

- 11/1 (火) 田中寿代 (コントラバス) 林典子 (p)
 2 (水) 藤溪優子 (p)
 3 (木) 三村哲子 (p)
 4 (金) 中島悦子 (ヴァイオリン) 林典子 (p)
 5 (土) 佐藤和宏 (クラリネット)
 6 (日) 岩佐明子 & 今村順子 (ピアノデュオ)
 8 (火) 宮崎万里 (ヴァイオリン) 植田浩徳 (p)

- 10 (木) 小笠原薫 (ヴァイオリン) 山内尚子 (p)
 11 (金) 鈴木華重子 (p)
 12 (土) 井手智佳子 (Two Bones)
 15 (火) 西川奈江 (ヴァイオリン) 井手智佳子 (p)
 16 (水) 高村明代 (ヴァイオリン) 河本孝 (ヴァイオリン) 林典子 (p)
 17 (木) 武村美穂子 (フルート) 藤溪優子 (p)
 18 (金) 瀬戸由布子 (コントラバス) 林典子 (p)
 19 (土) Fairbanks Chiharu (p)
 20 (日) 鄭里花 (ソプラノ) 二塚直紀 (テノール) 西脇美 (p)
 22 (火) 並河寿美 (ソプラノ) 藤江圭子 (p)
 24 (木) パラグライハーブ
 26 (土) 外山聖子 (ソプラノ) 板井美知・岡元優子 (p)
 27 (日) 森池日佐子
 29 (火) 川上布美 & 松井典子 (ピアノデュオ)

■クラシックライブハウス PIA Julien

三宮駅北側近藤ビル9階

078-391-8081 月曜定休

<http://pia-julien.com>

ジャズクラブ Holly's

- 11/3 (木) Vひきばきょうこ
 4 (金) V林幸D松井道朗
 5 (土) V藤村麻紀G西田誠
 10 (木) V元木美穂P小泉ゆうこ他
 11 (金) P名倉学他
 12 (土) V畑山紀美代P杉本亨B大澤善樹D秋田晃
 17 (木) P山本容子他
 18 (金) P辻佳孝B萬恭隆D松田広士
 19 (土) VあべやすこB阪口典右D山田幸彦
 24 (木) セッションナイト
 25 (金) Sax鈴木久美子B宗川信他
 26 (土) V河本江関子他

■KOBE JAZZCLUB Holly's

三宮駅北徒歩7分、新神戸駅南徒歩7分

加納町 078-251-5147

<http://www.kobe-hollys.com>

ライブハウス チキンジョージ

- 11/7 (月) Matilda's Cook 5th Birthday Paty /
 guest: U.K. (MC)
 11 (金) Sound Schedule
 12 (土) フジファブリック

- 13 (日) 14 (月) 15 (火) 矢沢永吉LIVE HOUSE
 TOUR 2005
 16 (水) 斎藤和義ツアー2005
 17 (木) BAHO
 18 (金) TRIX
 19 (土) DIMENSION
 20 (日) FLOW
 21 (月) CREAM再結成記念企画ライブ
 23 (水) ラブハンドルズ
 25 (金) 因幡晃
 26 (土) 真心ブラザーズ
 27 (日) THEATER BROOK presents 'CIRCLE GEORGE'
 28 (月) くらり
 29 (火) ヴォーヤージュ

■THE LIVE HOUSE CHICKEN GEORGE

生田神社西 078-392-7431

<http://www.chicken-george.co.jp>

ジャズ喫茶 萬屋宗兵衛

- 11/4 (金) 浅井良将 (AS) 杉原俊 (G) 李祥太 (P)
 奥村麻里 (B) 三浦亮治 (Ds)
 5 (土) 田辺's (JAZZFUNKBAND)
 6 (日) 田澤良介 (Tp) 浅井良将 (As) たなかかつこ
 (P) 坂崎拓也 (B) 清水勇博 (Ds)
 9 (水) アヤコ・ヨシダ・アルヴァニス
 10 (木) ASH (Japan tour from New York)
 11 (金) 伊藤志麻 (VO) ~女の美学~
 12 (土) 安部佐知子 (P) 松本真由美 (G) 清水邦彦
 (B) 山田幸彦 (Ds)
 13 (日) Soul Area4 BigBand (ラテンジャズ)
 14 (月) 浅李 Duo (JAZZ)
 18 (金) 山田友和 (tp) 他
 19 (土) いとう翔ジャズボーカル教室発表会
 21 (月) 徳永英彰 (g) 他
 22 (火) Monday Night Messengers
 23 (水) ほっとふり (JAZZ)
 26 (土) JACOMEDY (ジャズとコメディ)
 27 (日) 松永明子 (Pops/Adult Contemporary)
 30 (水) 今村鉄二 (Tp&flh)&FRIENDS

■ジャズ喫茶 cafe萬屋宗兵衛

元町一番街 078-332-1963

<http://www.sobei.net/>

★ノーチャージのライブはチップ制

芸工大生の 才能溢れるシヨップ



12月6日(火)は寺門孝之
イラストレーション展が開催
される。

■セレンディップ

神戸市中央区江戸町1000
高砂ビル2階
☎078-393,8134
11時~18時 水曜休
<http://kchoiro.kobe-u.ac.jp/shop/>

諸口・小田の 音楽そして芝居語り

ラジオのパーソナリティー
としても活躍するカントリ
ーシンガー 諸口あきらと、ジ
ヤズビアニスト&ボーカリスト・
小田イタルの2人が、語りと
ライブ「物凄い男どもを引
き連れてー芝居語り」を開
催する。場所は生田新道鯉
川筋西へのエンターテイメン
トカフェ&サロン「フナネット」。
11月20日(日) 3時30開演。
■フナネット
神戸市中央区下山手通4-6-11
エクセル山手1階
☎078-332-1034



小田イタル



諸口あきら

どう考える? 老後の住まい…

有料老人ホームや高齢者
向け住宅を、親や自分の老
後のために探している人に、
高齢者住宅情報センターが
フォーラムを開催。関西・九州・
中国地方の有料老人ホーム
や、高齢者住宅15社が参加
予定、説明や個別相談を実
施する。また、同朋大学老
人福祉研究室の伊東眞理
子先生による講演「どう選
ぶ? 親の介護 自分の介護」
では、老後の住まいや生活に
ついてのアドバイス。11月
11日(金)11時~16時の間出
入り自由、会場は阪急グラン
ドビル(JR大阪駅・阪急梅
田駅下車 阪急百貨店隣り)。
左記の宛先に電話かFAX、
メール、ハガキのどれかで「住
所・氏名・電話番号・年齢・参
加人数」を明記の上申し込
みを。先着300名にご招
待券送付。

■高齢者住宅情報センター大阪
大阪市北区芝田1-4-8
大阪急ビル7階
☎06-6375-8830
FAX 06-6375-8831
kotai-foo@kurashi-sumai.com



伊東眞理子先生

GALLERY

浜田千鈴展 Chisuzu Hamada

色々な材料を使った「ミク
ストメディス」 という手法
で描かれた浜田千鈴の新し
い舞台。
メロディがきこえてくる線、
そしてふわりと浮かぶ面。独
特の淡い画面に静かな世界
が広がる。墨、アクリル、油な
どの抽象画を中心とした作
品展。ギャラリー・サカサ
ーカスで。

11月15日(火)~

27日(日)(23日休廊)
11時~19時(最終日17時)

ギャラリー

サカサカス

神戸市中央区花隈町9-13
ヒースコート山手2階

(地下鉄「県庁前」4番出口西
へ)

☎078-382-0689



水底の船



アーティスト的な作品が
展示販売されている

artinary 稲荷芸術祭その2

震災の傷跡が残る兵庫区入江地区では、学生たちが空きスペースに住み込み、リフォームしながらまちの人たちとコミュニケーションをはかる「住みコミュニケーションプロジェクト」が展開されているが、そのエリアの中心 稲荷市場にてアートイベントがおこなわれる。

「住みコミュニケーションプロジェクト」に参加している「住みコミスト」や、稲荷市場やその周辺が大好きな学生アーティストが集結。市場の空き店舗や松尾稲荷神社などで、「ほりだしものてん」、「まちだがしがし」、「五右衛門風呂ひらき」、「でたがり名人会」など、ワクワクするような企画が計画されている。11月5日(土) 10時〜17時。

■神戸市兵庫区稲荷市場
JR神戸駅下車徒歩約8分
稲荷芸術実行委員会
☎090-973-90868
http://www.suniconi.com/



稲荷市場

大人のための 絵本の読み語り



叶桂子

戦後60年経った今日、戦災の記憶は薄れつつあるが、「特攻隊員の尊い命のおかげで私たちがいる」と、フリーアナウンサーの叶桂子さんは、絵本「すみれ島」の朗読を通じて平和の尊さを伝えている。「すみれ島」は、太平洋戦争末期、特攻隊の若者と、特攻の意味を知らなかった子供たちとの心の交流を描いた絵本で、戦争を体験した世代はもちろん、若い人達の涙を誘う名作。

かつてラジオの人気番組「ABCヤングリクエスト」ナビゲーターとして活躍した叶さんが、「命の尊さを伝えたい」と静かな語りで戦争とは何かを問いかける。

11月27日(日) 16時〜
■カフェ・ド・佛蘭西
灘区天城通8・5・11
阪急王子公園徒歩約10分
チケット500円
☎078-881-2122

NEWS

甲陽園の小さな画廊 「アトリエ・ソ」



菅田英一さんと斎藤暉美子オーナー

9月16日〜24日、西宮市の版画家 菅田英一さんの「たのしいシルクスクリーン版画展」が開催された。花やネコたちを描いた菅田さんのシルクスクリーンの他、絵手紙も展示。「ぼくの絵手紙はらくがきから生まれる。絵手紙は絵が上手な人だけが描くものではないと思う」と菅田さん。そのさわやかな色彩は、ひとあし早いさわやかな秋風を、緑の中のギヤラリーに運んだ。



菅田さんの作品

■アトリエ・ソ
西宮市甲陽園若江町7・8
☎079-877-15872



じつは うたがっていましたか
こうして体験すると
すばらしさが わかりました



人類は話すということから 自由に
なったのです。考えただけで
オウムがしゃべってくれる



もしも このオウムに
欠点があるとすれば
どこででしょう



ひみつがなくなる ということです
すこしでも考えれば ひとにいられたくない
ことでも しゃべってしまいますから



月天心 貧しき町を通りけり

大谷 成章（フリーライター）

剪画／とみさわ かよの

しんちゃん甲南女子大で多文化共生を勉強している中国・内モンゴルからの留学生。本当の名前はモンゴル語で十一字も書くから、短く呼んでいる。

私たちNPOひょうご農業クラブの畑で草取りを手伝いながら隣の田植えを見て「なんで水の中に草を植えるの」と不思議がついていた。内モンゴルには稲作がない。

ハリス君は六甲アイランドで育ち、アメリカ西海岸の大学に留学している。夏休みに手伝いに来てくれた。20歳になったが、将来の方向を考えるためにプリミティブでベーシックな農業を経験したかった、と言っている。

畑にはシマヘビとカラスヘビの二家族がいるが、その日はカラスヘビが散歩に出てきて、ハリス君は後を追いかけていった。「不思議で、おもしろいですね。Sの字を書いて前進するようすは」と感動していた。

藤田君は兵庫大学で環境を勉強している。畑

の手伝いのほかに野菜売り場で売り子になってくれる。

いま4回生で、ようやく就職先が内定した。卒論にはNPOひょうご農業クラブの活動を取り上げることにした、と言っている。

NPOひょうご農業クラブは、自分たちで無農薬・有機栽培の野菜を育てるとともに、県下の同じようなグループの生産物を仕入れて、安心でおいしい野菜を安く売っている。野菜中心の食堂も、地元のボランティアの協力で六甲アイランドと相生市で計4店を開いている。高齢者向けのお弁当が人気で、配達の手手が足りず悲鳴を上げている。

理事長は元コープこうべの副組合長で、相生の農村部にある生家を本拠地にし、休耕田を借りて都市と農村をつなぐ非営利活動を開始した。私たちは理事長を「村長」と呼んでいるが、野菜作りから始まって、売り場や食堂の開設、

ネットワークづくり、集荷や食育の推進など獅子奮迅の働きぶりだ。

村長とは大震災の復興を話しあう会の後、三宮のガード下の飲み屋で知りあい、百姓仕事に誘われた。私は、大震災で自然の驚異と尊さを見直した、というような高級な理念ではなく、週1回程度の土いじり、と軽く考えているから、8年続いているのだと思う。

村長の獅子奮迅は尊敬ものだが、事業の展開は猪突猛進でもある。後ろに引くことはない。事実、村長が運転するトラックはバックギアが入らなくなる。代わって運転した私はあぜ道で立ち往生したことがある。

最近の猪突猛進は、HAT神戸の復興住宅で野菜市を開いたことだ。県の空地活用パイロット事業に乗って、近くに商店がなく買い物に

不便な思いをしている高齢者向けに安全でおいしい野菜の朝市を開いたのだが、その分、畑に手が回らなくなった。この夏は野菜の栽培か雑草を育てているのか分からなかった。

地元の脇の浜ふれあいのまちづくり協議会の応援もあって、居住者たちとなかよくなったが、この10月でパイロット事業が打ち切られ、売り場の空地が閉鎖され、さすがのイノシシも後退しなければならなくなった。

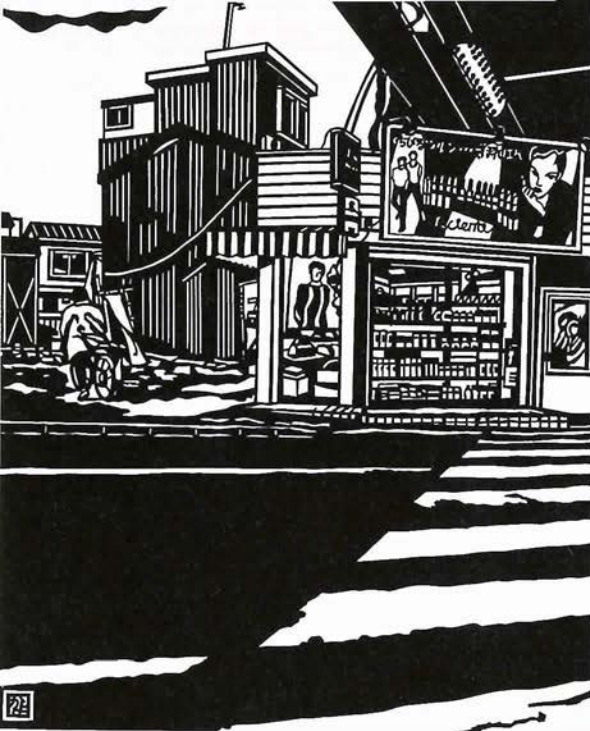
でも、新都心と銘打ったHAT神戸の別の面を見ることができた。高齢化率が37%を超えていて、超高層住宅の外見とは逆に、活力減衰の方向に向かっている。

まちづくり協議会の竹内猛矩委員長は「被災者への住宅提供の緊急対策として県や市はよくやったと思うが、自立支援のソフトがなくて難民キャンプのようになってしまった」と言う。

「ベッドタウンではなく、このまちでお金が循環して、みんなの生活が自立するように、地域に雇用場を生み出したい」と願っている。

竹内さんは俳人でもある。大震災10年の心境を、蕪村のこの句に託している。

月天心 貧しき町を通りけり
ハッピー・アクティブ・タウンの
完成はまだ遠い。



詩画集『神戸、あの日より—1995・故郷』から掲載 「市場跡(東灘区)」

■大谷 成章(おおたに・しげあき) 1933年
但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神
戸つ子編集者。その後、フリーライター。「阪神・
淡路大震災10年」(共著、岩波新書)など。

「五線紙の街」 神戸を彩った人たち

文・宮田 達夫 絵・中西 省伍



*

*

ワープロの電源を切り、櫛沢は立ち上がった。久しぶりでホーム・パーティに招かれていて、さほど遅刻せずに出席できる時間だった。

『アナタ。そろそろ着替えでしょ』階下におりと美也夫人がスーツにブラシをかけていた。

『あれ。お前さんはまたしても、行かないのかい』櫛沢は訊ねる。

『ええ』

夫人がパーティを好まぬため、たいていのパーティは櫛沢単独の出席である。

『よかったわね。連載も終えたし、例のカネミツの問題も、市が買い取ってくれることで解決したし、暴力団新法は実施されるし。あなたネクタイはこれにしてください』

『わかった。わかった。タクシーを呼んでくれ』

ホーム・パーティは神戸に本店があり、今や全国的名店となった洋菓子店の社長宅で行われる。バーボン・クラブという昭和ひと桁世代中心のクラブがあり、たいていはどこかの店を借りて集まるが多く、今回のようなホーム・パーティは稀だった。

社長宅は海の見渡せるマンションの六階と七階だった。六階の広間に入るとすでにメンバーのほとんどが揃い、港の夜景を眺めて口ぐちに

画家・鴨居玲に、バーボンクラブに出席ないかと声をかけると、こんなハガキが来た。

『この所連日飲みすぎのため『ヴァーボン』を少ししか飲まない会』があればぜひ入会したい心境です』

これが彼からの最後のハガキだった。

面白いのは、バーボンクラブメンバーで作家の筒井康隆さんが、自分の小説の中の登場人物にメンバーの名前とキャラクターを使ったりしたことだ。

朝日新聞連載、筒井康隆の『朝のガスパール』には次のような記述がある。三月二十六日第一五六回を引用しよう。

賛嘆の声をあげている。

メンバーは一業種一名と限られていた。画家、彫刻家、神官、声楽家、ファッション・デザイナー、放送プロデューサー、日本舞踊家、ジャズ・ピアニスト、カメラマンといった顔ぶれで、うち夫人づれが半数ほどと、あとは独身女性。宇宙船ビーグル号だなあ、と、いつも樺沢は思うのだ。

ヴァン・ヴォクトのあのサイエンス・フィクションのように各科学者の専門用語の仲介をする総合科学者がいなくても、職業こそ違え知的共通語で喋ることのできる知性の持ち主ばかりがここには集まっていた。

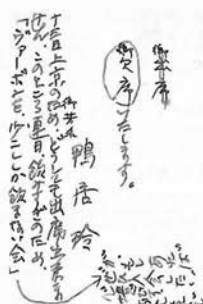
あたりさわりのない話題ばかりに終始しているようにも見えるのだが、いざ専門のことに話が及ぶとそれぞれが修練に裏づけされた深い確信に満ちていて、しかも平易な表現で掘り下げた内容を全員に披露でき、みんなに耳を傾けさせる話術を持っていた。

専門、専門による考え方の差異は、特に樺沢の創作意欲をしばしば刺激した。

心地よく耳に響くあたったかいことばと楽しい



筒井康隆(左)と



鶴居玲からのハガキ

噂ばなし。

文壇パーティーの如き議論や仕事がらみの会話のない心安らかな時間。

樺沢は陶然としてバーボンの香りに酔う。グラス片手に彼は室内を見まわす。趣味のよい装飾と備品。ひと隅に応接セットが置かれ、中央には洋酒瓶が林立し料理の置かれたテーブル。そしてバルコニーへのガラス・ドア。

あれえつ。ここへはいちど来たことがあるぞ。いやいや。そんな筈はない。でも、なぜそう思ったのだ。樺沢は改めて周囲を見まわす。そうだ。ここはあの最初のパーティー場面の舞台にした須田医師のマンションと似ているのだ。そういえば、部屋の隅には階上への階段もある。

以下略

* * *

放送局勤めの田宮三郎が報道勤務の時、夕方のワイドニュースの担当になり、丁度その頃、新井満は神戸電通に勤務していた。

神戸でバレイリーナ・今岡頌子といえは知らない人はいない。その今岡と親交がある田宮は、神戸の芸術祭で新井満の作曲した「月山」を公演すると今岡から聞いた。夕方のワイドニュースのネタには最適だ。しかし神戸に新井満という作曲家が居たとは知らなかった。



■宮田達夫（みやた たつお）
一九三六年東京生まれ。毎日放送入社、大阪府警・大阪市・万国博などの記者クラブ担当。MBSナウ担当後、報道局兼事業局長の二足のわらじで、放送記者として宝塚、歌舞伎を取材。イベントプロデューサーとしても活躍。元事業局長。バーボンクラブ会員。フリージャーナリスト。

チヨ―エキ

出石 アカル

絵・菅原洸人

題字・六車明峰



「電車に乗ったら、わしの隣にはだーれも座りやらへん。近づきよらんのや。わし、そない人相悪いかなあ。シゴトやめてから、目つき優しなった思うけどなあ」

例の加賀繁躬さん、58歳である。

「やくざ」という言葉を詳しく知りたくて、「日本国語大辞典」を引いてみた。

【カブ賭博の一種である三枚ガルトで、八（や）九（く）三（さ）の札がくると、プタのうちでも最悪の手になるところから、①一般に物事が悪いこと。役に立たないこと。（略）②博打打ち。無職渡世の遊び人。また、無頼漢。不良。ならずもの。やくざもの。（略）】とあり、使用

例として「やくざ奴に秩父の路銀皆にされ」（柳多留）などが載っている。

マイナスイメージばかりが並んでいるが、当のご本人は、これに加えて少しばかりのプライドも持ちのようだ。

「自分の人生、良かったか悪かったかは、死ぬ時やないと分かりまへん」が口癖である。

さてその加賀さん、その世界から身を洗ってもう十数年にもなるが、いまだ何となく漂うものがある。わたしの店では、カウンターの隅っこの目立たない席に座っているのだが、入って来た一見さんは一瞬身構えておられる。ただ、わたしと彼との会話を聞いてすぐに安心はされ

るのだが。

その彼がまた入院するのだという。背中に、片手に余るほどの大きなデキモノが出来て、切ってもらおうのだと。検査の結果、幸い良性とのこと。そこでわたしは彼に言う。

「せっかく背中切るんやったら、ついでに体中の薄皮をイカの皮めくるみたいにスウィットめくってもらったら？そしたら遠慮無う温泉にも行けるのに」

「マスター、また無茶言いまんなあ。そんなことしたら、体中ケロイドになりまんがな。ええかげんにしときなはれ」

以前たのんで見せてもらったのだが、彼の体にはやはり、見事な彫物が入っている。

「わしのんはカラーでっせ。むかし、テレビでパナカラーのCMやつてたころに入れましたんや」

なるほど、青、赤、緑とカラフルだった。しかし彼は、夏でも長袖の服である。しかも胸元を見せない丸首のシャツを着ている。氣を使っているのだ。ところが、

「時にはチラッと、わざと見せる時がおまんねん。自分でも狡いなと思いまっけどな。いやいや、ほんまにケンカになりそうな時にはしまへんで。トラブル起こしても、いまさら警察にねがうことが出来まへんよってにな」

考えようによつてはかわいいものである。

で、また一週間ほどの入院になるのだが、読書好きの彼は、図書館から何冊かの本を借りて持ってゆくのだと。また前回のように看護師さんに不思議がられるのだろう。風貌からはとて

も読書好きには見えないのだから。

「むかし事務所で本読んどつたら、組長おやじに言われた。『本読むんやつたら、チョーエキ行つてからにせえ。なんぼでも時間ある』て。そこから、賭博と拳銃チヤカで行つてた時に、よおけ読んだんや」

この人のチョーエキ話がまたおもしろい。

「元氣者の男ばかりでんがな。たまつて来まんがな。ほんなら、ヌード写真の載つてる週刊誌持てて布団ふだん中もぐり込みまんねん。『皆さんお先にごめんやっしや。ちよつとアタリまっさ』言うてな。そやけどケンカになったこともあつた。たしかM保純のヌードが載つてる本やつた。誰かが置いてたんや。そしたら他の者がそれ持てて布団かぶつてコソズリしよつたんや。ほんなら、それ知つた持ち主が怒りよつたがな。『あれは、俺が真つ先にイコ思てたのに』て」

この、男の哀しさ、女性にわかるでしようか。もうひとつ彼から聞いた、今度はためになるチョーエキ話。

「高血圧の者はあきまへん。みんな塩で味ごまかしよるから。みそ汁なんか、だだっ辛いばかりですわ。そやけど糖尿病治を思たら、チョーエキ行きなはれ。一年ぐらい行つたら治りまっせ。あそこはホンマ粗食やからな。」

今回は本誌の品位を少し落としたかも知れませんがお許しのほどを。

■出石アカル（ずし、あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人、兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒーカープの耳」（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

鏡の中のサムライ

中野 順哉

絵・題字 平田 郁

「ということとは孝さん、渡米をして、パリにも行つて、結局この神戸で仕事をすることを選んだわけですね？神戸の魅力つて一言で言えば何ですか？」

一九八七年十月。最近になってすこし広がった店舗のソファに腰掛けて、僕は新聞記者から質問を受けていた。記者は三十代半ばの男性。社会部だという。どういうわけか延原はうちの店の経営にも興味を持ち始め、時々こうやって記者をつれてくる。持ち前の面倒見のよさが四十を越えて余計に「成長した」のかもしれない。僕はありがたさ半分、面倒くささ半分といったところで記者の質問に答えていた。

「パリに行ったときに、ある老人に会いましてね。その人が僕の先生の先生……って言うとし話がややこしくなってしまうのですが……彼にその老人が戦前、パリで会ったことがあるそうなんです。老人は彼のことをサムライなんて言っていました。そのサムライが『神戸は西洋人がいくら逆立ちしたって生み出すことの出来

ない都市だ』なんて言っていたそうですよ。本当かなって半信半疑だったんですけど、それを確かめたくなったんですよ」

「ほう、なるほど……その先生の先生という方は、なんと仰る方なのですか？差し支えなければ教えていただきたいのですが……」

「有馬休六です。日本にバーマネントを初めて普及させた人物ですよ。神戸に店を出してから、その後は上海のフランス租界に店を出していたそうですよ。その後は……確か大阪の心齋橋でしたっけ……当時の女優さんは皆、彼のところへ行つていたなんて話が残っていますよ」

「そうですか……そんな人物がいたとは全く存じ上げませんでした。いやいや勉強不足ですね……ところで、その有馬さんが仰つていた『神戸』。実際にここでお店をされてみた結果、どうでしたか？納得というところですか？」

「さあ……よく分かりませんね。ただ今は神戸にあこがれる観光客も多いみたいですし……そんな場所です美容師をしていることに、ちょっとし

た誇りを感じている：かな？いずれにせよ開店以来持ち続けてきた『神戸をパリにしたい』という夢は今でも健在ですよ」

記者が帰る頃になつて延原が店にやつてきた。五、六分談笑して記者を帰すと、延原は忙しそうにカバンから最新型の携帯電話を取り出して方々に電話をしばじめた。このところ彼の率いる団体も随分忙しくなつたようだ。念願の「サ

ントリー音楽賞」の受賞も実現して二年。様々な地方のホールから声もかかり、有名なアーティストとの共演の数も増えた。

「やつてる音楽は古いくせに、使う機械は最新型なんだね」

電話が一段落ついたところで僕は延原に声をかけた。延原は「ん？」と言つて僕の顔を見ると「ああ、これか…」と改めて手に持っている



電話を見つめた。

「やつと900グラムになったんや。それまでは肩からかけるショルダーバックみたいな電話やったけれどな。あれは3キロもしたんやで。殆どがバッテリーで…そのくせ四十分しか喋られへん。やつとそれらしいもんが出来てきて良かったわ。そやけれどこのオーケストラも考え方は割りと古い。ファックスですら僕らの団体が一番最初に使い出したんやからな。ところでさっきの記者はどうやった？なんか先方はえらい喜んでたで。面白い話、いっぱい聞かせてもらたつて」

「そうかな…ああいうのつてやつぱり苦手だな…喋っているうちに自分の薄っぺらさが手に取るようにわかってきて。結局神戸とのつながりについて皆質問するけれど、その度に僕は有馬休六という名前を出す。でも僕は彼に会ったことも無ければ、その人となりを直接調べてみたわけでもない。全部又聞きさ…やつぱり、君の言ったとおりかな？」

「何が？」

「忘れたのかい？僕が神戸に店を出す寸前、君にバリでのことを話したろ。その時君は鹿児島にいつべん行つてはどうかって言つてたじゃないか…」

「ああ、覚えてるよ」延原がその先を続けようとした時、けたたましく手元の携帯電話が鳴った。延原はそれに話しかけながら、そそくさと店を出て行つた。

* * *

「で、なんでわざわざ一緒に行かなあかんね

ん…ほんまに困つた話やで」

半分冗談まじりで飛行機のシートに腰掛けた延原をなだめながら僕は「まあ、良いじゃないか」の一点張り。もう発進寸前だというのに、席を離れてみたり、いつまでも電話をしようとし続ける延原をスチュワードスが叱りつけた。

「たつた一時間ちよつとのフライトじゃないか。まさか君らのように東ドイツに行くわけもないんだから、落ち着けよ」

この男という真剣な旅が珍道中になつてしまふな…と思ひながらも、窓の外を見ると不安とも倦怠とも言えない気分が胸をいっぱいにした。

「もう三十九歳。来年は四十だ。それなのに今さら自分探しの旅でもないだろうに…」心の中でそう思ひながら眼下に広がる雲を見つめている。雲の間から時々きらめく海や険しい山々が顔を出した。思い起こせば欧米には行ったことがあるくせに、僕はまだ兵庫県より西に行ったことがなかった。それを思い出してふと延原の方を見ると、手持ち無沙汰になったのかすっかり眠っている。その肩をぽんぽんと叩くと、はつと目を覚まして「もう着いたんか？」と首をあげた。

「まだだよ。それよりもさ…思い出したんだけど…実は僕、小さい頃少年合唱団に入っていたんだ。ボーイソプラノっていうのかい。何度かコマースヤルでも歌つたことがあったんだよ」

「へえ…割りに芸達者なんやな。でも急に、なんでそんなこと思い出したんや？」

「さあ…窓の外を見ていたら兵庫より西に行
ったことがないなあと思ってたね。もしかしたら
僕のコマースシャルの声はこの辺まで届いていた
のかなと思っただけさ」

飛行機は定刻どおりに鹿児島空港へ到着した。
「椰子の木がお出迎えか…」といつもの独り言。

高橋島
×アイランドリゾート



そこで連絡バスに乗り換えたが、延原は到着と
同時にまた電話。何も走っていないいまっすぐな
一本道をバスは走ってゆく。ここが鹿児島とい
う場所かと単調な景色をぼんやりと眺めていた。
しかし直にそんな風景は一掃され、鹿児島市
内に入ると賑やかさが増してきた。その後いく



引っ張ってバスを降りるとふっと澄んだ空気が鼻先をかすめている。それをふっと大きく吸い込んでぐいと伸びをする。

「ここが川内か…」

「何か感じるか？」
延原も同じように伸びをした。

「別に…空気の良
い田舎町だってところかな？」

「で、その墓つち
ゆうのはどこにある
んや。このすぐ近くか？」

「知らないよ…で
もまあ、川内市とい
えば泰平寺という有
名な寺がある。そこ
にでも行って聞いて
見れば何かわかるん
じゃないかい」

「ほんまかいな…」

まずはホテルに荷
物をおいてタクシー
を呼ぶ。「泰平寺」
と言っただけで運転

つかの温泉町をぬけ、飛行機と同じく一時間ほ
どバスに揺られたところで「川内駅」にたどり
ついた。退屈さですっかり伸び上がった延原を

手は一切承知という風情。まもなく真言宗、医
王山正智院泰平寺と書かれた門の前にたどり着
いた。さっそく本堂に向かい住職を尋ねると若

い僧侶が出てきて、今は留守だという。仕方なくその僧侶に有馬休六という人物の墓を探しているのだという、少しお待ちくださいと言ったで奥へ引っ込んでいった。二十分ほど待たされたであろうか、さっきの僧侶が戻ってきた。

「有馬休六さんという方のお墓なら、ここではなく、川内駅の一つとなりに隈之城という駅がございます。その駅の直ぐ隣に墓地があります。その中の一つだと思えますが……」

僕たちは丁寧な礼を述べ、ついでにタクシーを呼んでもらった。随分離れた場所かと思っていたが、車でいけばほんの十分くらいの場合に隈之城という駅があった。純和風の建物でなかなか風情があり、地元でもシンボルになっているそうだが、果たして件の墓地はその隣にあった。

花を買い墓地に入ってゆく。時代も大きさも違う墓が雑然と並んでいる。しかし有馬家というのはそこそこ大きな家であったのであろう、一際大きくて立派な墓石が立っていた。

「有馬家の墓……か」

僕は花をたむけ手をあわせた。延原も同じように手を合わせていた。ふうというため息をもらすと、僕たちは顔を見合わせ

「これで仕舞いかな？」

「ああ、そうみたいやな」

と頷きあった。そして墓地を後にしようとしたときに、丁度僕たちの前に一台のタクシースtopした。中から一人の紳士が出てくると

「有馬休六さんのお墓参りに来た人たちというのとはあなたたちですか？」と真顔で訊ねる。

そうですがと答えると「良かった……間に合った」と独り言のように繰り返している。

「さっき泰平寺から電話がありましたね……それで飛んできたんですよ。もしお時間が許すようでしたら、是非うちの祖父に会っていただきたいのですが……随分老練もちろしているのですが、有馬休六さんの話となるといつも興奮してしまつて。いかがでしょう？家はこの極近所なんです」

僕は延原の方を見て「君はどうする？」と訊ねた。延原は頭をかきながら

「一緒に行くがな……どうせ一人でいてもやることもないんやから」と苦笑いをして見せた。

「ところであなたのお爺さんと、有馬休六さんはどんな関係なんですか？」

「いや、古い話で私もよく分からないのですが……その昔、有馬家のお屋敷がまだあったころ。ずつと執事をしていたそうなんです。ただ休六さんからは大事なものを預かっているそう……休六さんのことを尋ねてくる人を捕まえてはそれを見せて昔話をね……」

僕と延原はそんな話を聞きながら車に乗り込んでいた。あたりはそろそろ夕暮れ。澄んだ空気にもしっかり馴染んでいることを改めて僕は感じていた。



■中野順哉（なかのじゅんや）
一九七〇年生まれ、関西学院大学文学部フランス文学科卒業。日本テレマン協会代表代行。上方講談の作家でもあり、すでに二〇を超える作品が上演されている。